3.6 給与タイプからみる活動を通しての自身の変化の違い

これまで、給与タイプ別に、教室とのかかわりの実態まで見てきた。ここからは、内面の意識や考え方について、その差をみていきたい。

まず、放課後子ども教室の活動を通して、自身の変化があったかという質問に対する回答と、給与タイプとのクロスをみていく。

固定給タイプは、

「学校の関係者とかかわりを持つようになった」(75.6%)

「地域の学校や子どもの集まる施設について意識・関心が高くなった」(61.4%)

「地域の団体・組織の活動に以前より積極的に参加するようになった」(40.7%)

「子どもの居場所づくりに関する各地の取り組みに対して意識・関心が高くなった」(32.9%)

という項目において、他タイプより数値が高いことから、**他の組織・機関への関心・意識・関わり**を持つようになったといえる。

時給／日当タイプは、

「地域において色々な子どもに声をかけたり、交流を持ったりするようになった」(70.6%)

「地域の人と挨拶を交わしたり、よく話したりするようになった」(74.1%)

「保護者と挨拶を交わしたり、かかわりを持ったりするになった」(74.6%)

などの項目が他タイプより数値が高いことから、**保護者・地域との交流**をもつようになったといえる。

無償タイプは、他タイプより数値が高い項目がなく、放課後子ども教室での活動を通して、自身に大きな変化をもたらしている人が、比較的少ないということが言える。

表 3-6 活動を通しての自身の変化 × 給与タイプ (%)

		固定給	時給/日当	無償	
1	地域において色々な子どもに声をかけたり、交流を持ったりするようになった	79.3	70.6	42.5	***
2	学校の関係者とかかわりを持つようになった	75.6	46.1	55.2	***
3	地域の学校や子どもの集まる施設について意識・関心が高くなった	61.4	39.0	29.9	***
4	地域の人と挨拶を交わしたり、よく話したりするようになった	57.3	74.1	59.0	***
5	保護者と挨拶を交わしたり、かかわりを持ったりするになった	54.5	74.6	71.6	***
6	地域の子どもに対する意識や関心が高くなった	51.2	48.2	56.0	
7	地域の団体・組織の活動に以前より積極的に参加するようになった	40.7	32.9	26.9	**
8	子どもの居場所づくりに関する各地の取り組みに対して意識・関心が高くなった	32.9	15.4	26.1	***
9	地域の様々な問題について地域の人と話し合ったりするようになった	20.7	16.7	17.9	
10	その他	2.4	2.6	1.5	

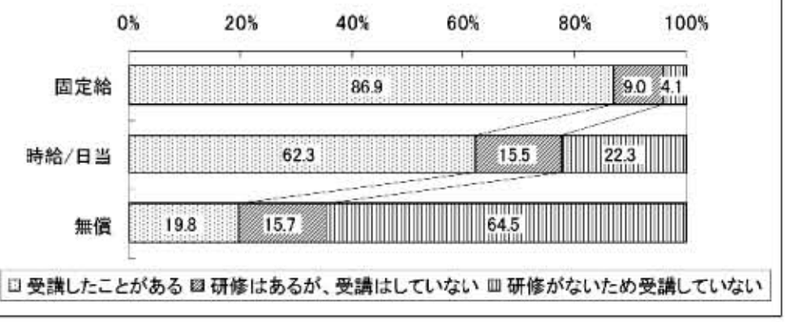
(複数回答：あてはまる項目に○をつける)

3.7 給与タイプからみる役立った研修の違い

給与タイプ別に、役立った研修の差はあるのだろうか。ひとまず、下記の図 3-7 をご覧いただきたい。

この図は、指導員として研修の受講経験はあるかという質問と、給与タイプのクロスをとったものである。3つの給与タイプは上から順に研修の受講経験が少なくなっていくことがわかる。(固定給 86.9%、時給／日当 62.3%、無償 19.8%) このことを踏まえたうえで、次の表 3-7 を見ていただきたい。

図 3-7 研修の受講経験 × 給与タイプ



(単一回答：あてはまる項目に○をつける)

表 3-7 は、受講した研修のうち、役立ったものはあるかという問いと給与タイプのクロスをとったものである。

固定給タイプは、「特別支援に関する知識・技法について」(64.8%)をはじめ、多くの分野の研修が役立ったとこたえている。これは、前述の図 3-7 より、多くの人が研修を受講したことがあるということに起因するのではないかと考えられる。

一方で時給／日当タイプを見てみると、他タイプよりも全体に役立った研修の値が低いことが言える。中でも、「放課後子どもプランの取り組み事例の紹介」(10.9%)「放課後子どもプランでの連携方策」(5.8%)が他タイプより目だって低い。

ここから考えられるのは、**①固定給タイプには講座が用意されているが、時給／日当タイプは参加できていない。②参加してみたものの、役立つ情報がなかった。**という２つである。

無償タイプは、全体的に数値の高い項目が多くなっており、いろんな研修に参加していることが読み取れる。また、「地域の子どもや子育てを取り巻く現状について」(57.7%)や「生涯学習や社会教育、児童福祉に関する概論」(34.6%)などの一般的な生涯学習の講座・研修が役立ったと回答している人が比較的多い。

表 3-7 役立った研修 × 給与タイプ (%)

		固定給	時給/日当	無償	
1	特別支援に関する知識・技法について	64.8	41.6	0.0	***
2	ケガや事故に対する応急処置や初動対応について	57.9	53.3	30.8	**
3	子どもの安全管理と防犯などの安全対策について	55.1	41.6	46.2	**
4	放課後子どもプランの取り組み事例の紹介	50.5	*10.9*	34.6	***
5	子どもの発達や子どもの心理について	50.0	41.6	46.2	
6	子どもの遊びや体験活動の手法について	39.8	27.7	0.0	*
7	子どもとのコミュニケーションについて	34.3	31.4	42.3	
8	放課後子どもプランでの連携方策	29.2	*5.8*	26.9	***
9	地域の子どもや子育てを取り巻く現状について	28.2	14.6	57.7	***
10	活動プログラムの企画・実施方策について	22.7	2.2	7.7	***
11	パソコンの基本的な操作方法などについて	19.9	1.5	7.7	***
12	生涯学習や社会教育、児童福祉に関する概論	15.7	11.7	34.6	**
13	育児・保育に関する知識・技法について	15.7	9.5	7.7	
14	ボランティアなどの地域人材の確保・連携方策	10.6	2.2	30.8	***
15	体験活動のフィールドや受入施設等の紹介	6.0	2.9	15.4	
16	広報・プレゼンテーションに関する技法について	6.0	0.0	11.5	***
17	その他	0.9	1.5	0.0	

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

3.8 給与タイプからみる受講してみたい研修の違い

では、受講してみたい研修にも差は表れるのか、表 3-8 を追ってみていきたい。

固定給タイプは、全体にあまり数値が高くない。これは、研修を充分に受けてきたのか、もしくは受ける時間が業務的にないのか。いろいろな要因はあれ、受講意欲はそれほど高くないことがわかる。

一方で先ほどの 3.7 では役立った研修が少なかった時給／日当タイプであるが、役立つ研修がないためか、受講したい研修が他タイプより多くの項目で数値が高いことがわかる。**非常に受講意欲が高い**といえる。このタイプへの研修の周知が必要となりそうだ。

特に、数値の高い項目の傾向からみると、経営・運営に関する知識よりも、**子どもと関わる内容**のものが多い。「ボランティアなどの地域人材の確保・連携方策」が 6.6%と低いのも、コーディネートは他の固定給タイプの人に任せるといった意識があるのではないかと考えられる。

無償タイプは、ばらつきがあるが全体になんでも学びたいということが読み取れる。

表 3-8 あれば受講してみたい研修 × 給与タイプ (%)

		固定給	時給/日当	無償	
1	活動プログラムの企画・実施方策について	33.3	11.8	11.9	***
2	子どもの発達や子どもの心理について	32.9	52.2	36.6	***
3	子どもの遊びや体験活動の手法について	32.5	39.0	23.1	***
4	特別支援に関する知識・技法について	30.5	37.7	15.7	***
5	ボランティアなどの地域人材の確保・連携方策	30.5	*6.6*	24.6	***
6	放課後子どもプランの取り組み事例の紹介	26.4	32.5	15.7	***
7	子どもの安全管理と防犯などの安全対策について	25.6	28.5	17.9	*
8	子どもとのコミュニケーションについて	24.4	42.5	36.6	***
9	ケガや事故に対する応急処置や初動対応について	22.4	42.5	26.1	***
10	パソコンの基本的な操作方法などについて	17.5	16.7	11.9	
11	地域の子どもや子育てを取り巻く現状について	15.9	31.1	25.4	***
12	体験活動のフィールドや受入施設等の紹介	15.4	8.8	10.4	**
13	生涯学習や社会教育、児童福祉に関する概論	11.8	19.3	16.4	*
14	育児・保育に関する知識・技法について	9.8	17.1	9.7	**
15	放課後子どもプランでの連携方策	9.3	11.0	14.9	
16	広報・プレゼンテーションに関する技法について	9.3	3.9	7.5	*
17	その他	1.2	0.4	2.2	

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

3.9 給与タイプからみる活動における問題点の違い

活動における問題点と感じているものは、給与タイプによって違いがあるのだろうか。みていきたい。

固定給タイプは、「保護者からの要望等への対応」(26.4%)が多い。また、「安全管理員等の確保」(20.3%)など、人材の確保についても問題と感じている人が多いといえる。

時給／日当タイプでは、「学校との連携や教員との連絡調整」が 41.2%とかなり多く、いかに**学校との連携がとれていない**か見ることができる。また、保護者への参加呼びかけは少ない(18.9%)ものの、要望への対応が多い(25.0%)ことから、保護者を避けている傾向がみられる。

無償タイプは、「子どもの保護者への参加の呼びかけ」が(37.3%)と比較的多く、他の事務的な問題点は少ないことが分かる。図 3D をご覧いただければわかるように、高年齢がこのクラスには多いことを考えると、**子どもを放任するという親が多い**という問題に対する意見ととらえることができる。

表 3-9 活動における問題点 × 給与タイプ (%)

		固定給	時給/日当	無償	
1	学校との連携や教員との連絡調整	29.3	41.2	18.7	***
2	子どもが参加しやすい企画の立案	28.9	25.4	29.1	
3	子どもの保護者への参加の呼びかけ	28.9	18.9	37.3	***
4	保護者からの要望等への対応	26.4	25.0	7.5	***
5	学校行事との調整	24.4	17.5	17.9	
6	安全管理員等の確保	20.3	16.7	4.5	***
7	関係団体との連携や講師の確保	11.8	4.4	11.2	***
8	安全管理員等の登録・管理・適正な配置	11.8	4.4	2.2	***
9	指導員相互の連絡調整	11.8	7.9	4.5	**
10	企画を実施する際の調整	9.8	6.1	6.7	
11	市区町村教育委員会等との連絡調整	8.1	4.8	2.2	**
12	その他	6.9	4.8	2.2	
13	コーディネーターと指導者等との役割分担	4.9	4.4	3.7	

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

3.10 給与タイプからみる行政への要望の違い

では、給与タイプの違いに応じて、具体的にどのような施策をとればよいのか、行政への要望から方向性をみていきたい。

固定給タイプは、全体的に値が高く、要望が多いことが伺える。やはり、「予算の充実」(61.8%)や「指導員・ボランティアの人材の確保」(45.5%)が多い。

時給／日当タイプは、「保護者との理解・協力ができるような仕組みづくり」が 55.3%と 3 タイプ中最も高い値となっている。前述の活動における問題点では、保護者を避けているものの、なんとか行政に協力していただき、状況を打破したいと考えている人が多いといえるだろう。

無償タイプでは、他のタイプよりそれほど要望はないようだ。

表 3-10 行政への要望など × 給与タイプ (%)

		固定給	時給/日当	無償	
1	予算の充実	61.8	50.4	14.9	***
2	指導員・ボランティアの人材の確保	45.5	37.3	30.6	**
3	子どものニーズに合った実施内容への改良	45.5	37.3	30.6	
4	保護者との理解・協力ができるような仕組みづくり	33.7	55.3	39.6	***
5	研修の充実と資質向上	30.1	17.1	11.2	***
6	関係機関や支援団体との連携強化	24.0	8.8	9.0	***
7	地域施設の積極的な開放	23.2	9.2	23.9	***
8	指導員間の情報交換の場作り	22.8	17.1	17.2	
9	コーディネーターとなる人材の確保	16.7	16.2	11.2	
10	指導者間での連携強化	16.3	10.1	10.4	*
11	その他	4.5	3.5	3.0	

（複数回答：あてはまる項目に○をつける）

まとめ

本調査では、放課後子ども教室の実質的な担い手である活動指導員（スタッフ）のキャリア形成や、教室における活動内容や問題点・要望など中心に分析・調査してきた。これまでの放課後子どもプランに関する調査では、現在どのような活動を行っているのかという観点や、教室における役割という属性によって分析をするという観点がみられた。しかし、本調査で特筆したいのは、そういった基礎調査に加え、活動における給与の有無や給与体系に焦点をあてた分析を行ったことである。つまり、ボランティアと報酬の関係を分析することに焦点をあてたのである。以下、基礎調査を含めた本調査結果を大きく3つにまとめる。

1. 横浜市および江戸川区の放課後子どもプランを実施している教室、全423教室へ質問紙による調査を実施し、有効回収数は768名であった。性別比は女性が7割強となり、男性が少ないというサンプルであった。年齢は、40代以下、50代、60代以上と分けるとほぼ3割ずつとなった。また、40代以下では女性がほぼ9割近くとなっており、若い女性の回答が多くなった。

2. 回答者の実態や意識など、これまでのボランティア経験なども交えながら、単純集計から性別・年齢などで比較分析した。また、それを受けて放課後子どもプランとの関わりや意識などをみてきた。なお、教室において、男性は管理的な役割を、女性は子どもと遊ぶ役割を担っている人が多い。それを踏まえ、男女による特徴を述べると以下のようになる。

＜男性＞

・ボランティアはあまり取り組んでいないが、その中では自治会役員が多い。
・自分のため、地域のためにボランティアに参加する。
・教室において、事務的な面を担当することが多い。
・放課後活動を通して、学校関係者などの機関とかかわりを持つようになった。
・子どもを取り巻く環境や他の教室での取り組みなどの研修が役立ったと感じている。
・今後は、運営や管理に関する研修を受講したいと思っている。
・予算の充実と、人材確保を行政にお願いしたい。

＜女性＞

・ボランティアに積極的に取り組んでおり、PTA役員をはじめこどもとのかかわりを持つものが多い。
・ボランティアに参加する理由は、無理強いされて参加する人もみられる。
・教室において、子どもと遊ぶ・管理するという役割をもつことが多い。
・放課後活動を通して、保護者や地域の人など、いろんな場面で関わりを持ったと感じる人が多い。
・危機管理に関する研修が役立ったと感じている。
・子ども理解に関連する研修の充実を期待している。
・予算の充実もさることながら、保護者と理解を深める仕組みを整備して欲しい。

また、年齢差については、40代以下と50代は女性がほぼ9割近くとなっていたため、全体に性別による影響が強く出ており、性差の分析と同じような傾向がほとんどのクロスで見られたので、多くの言及は割愛させていただきたい。

その中でも性差が見られず、年齢差がでたものを挙げると、50代が最も指導員としての研修を受けていることが挙げられる。また、同じく50代が最も活動上のさまざまな部分に問題を感じ、行政への要望も、他年齢よりも多くを求めているということもわかった。

3. 給与の有無や給与体系を軸として、クロス集計を行った。分類の方法は、教室における現在の立場についての回答をもとに、固定給・時給／日当・無償の３タイプに分類した。給与タイプによって、以下のような特徴がみられた。

＜固定給タイプ＞

・ボランティアの面で、リーダーシップをとり、子どもへの指導ができる人物が多い。
・ボランティア活動は長期にわたり、頻繁に行ってきた。
・ボランティアに使命感を感じて参加をしている。
・放課後活動では、事務から子どもとの活動まで、ほぼ全ての役割を担っている。
・研修にも積極的に参加し、特別支援など多くのことを現場で役立てている。
・しかし、研修を改めて受けたいという気持ちはない。
・活動を通して、様々な機関とかかわりを持つようになった。
・現在、保護者への対応と人材確保に問題を感じている。
・予算と人材をもっと欲しいと考えている。

＜時給／日当タイプ＞

・PTA 活動などの、子どものためのボランティア活動を行ってきている。
・ボランティアは月に数回と負担にならない程度に参加する。
・しかし義務や無理強いによるボランティアの参加が目立つ。
・研修には６割ほどは参加したことがあるが、あまり役立ったものはない。
・これから様々な研修（特に子ども理解に関するもの）を積極的に受けたいと考えている。
・活動を通して、保護者や地域とのかかわりを持つようになった。
・学校との連携をもっととりたい。また、保護者への対応に困っている。
・保護者との理解をできるような仕組みづくりをして欲しい。

＜無償タイプ＞

・環境美化などの一般的なボランティア活動を行ってきた。
・ボランティアは、長年、週に１回趣味程度に続けるという傾向。
・地域社会へ貢献したいという思いがある。
・放課後活動では、保護者にもっと参加してもらいたいと考えている。

以上の調査結果から、放課後子どもプランをより充実した事業へとするために、以下のような提言ができる。

まず、指導者として実施される研修は、本調査におけるような給与タイプに分けて用意して欲しい。一緒くたに開催しても、固定給クラスにはあまり受講意欲はないし、他タイプも受けたい種類は様々である。効果的に研修を行うとすれば、子ども理解につながる研修を、時給／日当タイプの指導者に向けて実施すべきである。このタイプの人が、どういった特性をもち、意見をもっているかも、本調査を参考にしていただきたい。

そして、行政への要望として挙げられた「**予算充実**」「**人材確保**」「**保護者協力**」という３つのキーワードである。予算に関しては、すぐに対応することも難しいであろうが、残りの２つに関しては、給与タイプの違いで分類された固定給・時給／日当タイプそれぞれの強い要望である。人材確保について提言すれば、給与タイプで明らかになったキャリア形成に注目したい。固定給タイプになる、つまりリーダーシップを取れる管理能力のある人は、ボランティアに積極的に取り組んだ人が多い。時給／日当タイプになる、子どもとの活動を中心とする人は、PTA 役員をしているケースが多い。「適所適材」というように、ボランティアのキャリア形成から、必要な人材を選び発掘することで、効果的な人材配置ができるだろう。

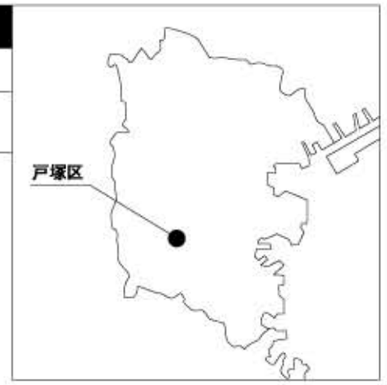
もちろん、性別・年齢による違いも大きくでている。そちらも参考にしながら、さらに細分化されたニーズ把握に努めることで、より本調査の効果が期待されるだろう。

Ⅲ　聞取り調査結果

1 民間団体による運営

事業名
横浜市「汲沢小はまっ子スクール」
横浜市「川上小はまっ子ふれあいスクール」

実施主体のプロフィール	
実施主体の名称	特定非営利活動法人　教育支援協会
連絡先	☎047-811-9594



1.横浜市の放課後子ども教室の概要

横浜市の放課後児童健全育成事業は、従来の学童保育（クラブ）の他に、はまっ子ふれあいスクール、放課後キッズクラブがある。はまっ子ふれあいスクールは、月曜日から土曜日、18時（一部19時）まで、全児童を対象とした遊びの場を提供している。（19時まで行っているはまっ子に関しては、17時以降は学童のように保護者負担でおやつを提供している。）

放課後キッズクラブは、従来の学童保育とはまっ子ふれあいスクールを合わせたような活動で、遊びの場と生活の場を提供している。はまっ子ふれあいスクールよりもスタッフの数が充実している。（17時以降は学童のように保護者負担でおやつを提供している。）

横浜FCの選手によるサッカー教室（八景小・川上北小）

2. 汲沢小はまっ子スクールの概要

活動の頻度は、月10回ほどで、トータルの時間は20時間ほどになる。登録数が学校全体の約半数いるということで、人気の教室といえる。参加人数も、閑散期の年末年始でも30～40人、多いときは80人も参加する。プログラムは、子どもたちに多くの体験をさせたいという思いから、季節の年中行事などを意識している。白玉ぜんざいを大量に作り、子どもたちだけではなく、地域の方にも振舞い、交流を深めるという活動をしてきた。

09年1月現在、キッズクラブへと移行する段階にあるため、活動はあまりできていないという。

3. 川上小はまっ子ふれあいスクール

川上小学校では、平成13年度から活動をスタートさせている。月曜日から土曜日まで、週に6日間、授業終了後から18時まで活動しているはまっ子ふれあいスクールである。常勤のチーフパートナー1人と、非常勤のスタッフ3人が活動を支えている。

主な活動内容は、自由遊びを主に毎月継続して行っているイベント（工作ディ・理科実験講座・編み物教室など）や、季節行事（クリスマス会・お正月遊びなど）である。イベントは、普段はスタッフやチーフパートナーが企画運営をする。保護者や地域の講師が、定期的に講座を開いたり、財団がもする。子ども向けのイベントのほかに、保護者対象の勉強会なども実施しているが参加者は少ない。

横浜市　「汲沢小はまっ子スクール」（21年3月よりキッズクラブへ移行）

はまっ子スクールチーフパートナー　HSさん　55歳
はまっ子スクールアシスタントパートナー　MMさん　44歳

1. 活動の現況

スタッフの人数は4～5人で、自由あそびを中心に、季節ごとのイベントや手芸などの活動を行っている。その中で、特に子どもたちにしつけを身に付けさせること意識して活動を行っているという。

具体的に教室でのルールを2つ決めているという。1つは「おもちゃはかたづけます」。もう1つは「あいさつは必ずしましょう」。これを守らないと、教室に入れてもらえず、もう一度あいさつをやり直すということを徹底している。初めはきちんとできない子どももいるものの、徐々に他の上級生や友達をみて、身についていくという。単なる遊び場のような扱いではなく、教室であるということを意識して、活動を行っている。

2. 放課後子ども教室との関わり

HSさんは自ら子どもに対して嫌われ役を買い、子どもたちには厳しく接していらっしゃるという。そういった点からも、彼女が強力なリーダーシップを発揮し、それに周りの指導員がついていくという雰囲気の教室になっている。

他の活動面においても、地元のボーイスカウトの指導者として活躍中とのこと。そこで得た遊びや知識などを、放課後子ども教室にも持ち帰っているという。また、民生児童委員～主任児童委員を務めており、積極的に児童とかかわる活動をしている。

こういったリーダーがいれば、組織としてもきちんとまとまっていくと考えられるが、「スタッフや指導員間の人間関係などで少し気になることもある」という話もあり、難しい課題でもある。

3. 現在直面している問題

これまではまっ子スクールとして運営してきた教室が、21年3月にキッズクラブに移行することとなった。それに際し、20年9月の運営法人の選定を行い、これまでとは別の運営主体である株式会社となった。

それにより、金銭的な面も含めた判断が遅くなったという。運営費などはもちろんのこと、プログラムで使用するための小道具すら買えないという状況とHSさん。100円ショップが使えないことは大きな打撃となっている。

活動にあたる指導員と、会社部門との中間に立つマネージャーが、判断・行動が遅いのが大きな原因とのこと。会社組織の動きづらさやフットワークの遅さが大きな悩みとなっている。運営に関する方針などは、運営団体で決定するものである。しかし、子どもの活動を保障する意味でも、活動に直接的に関わる備品などは、行政で補助する等の対応が必要になるのだろうか。

4. 聞取り者の感想

前述の質問紙による調査に、自由記述をしていただく項目をおいた。その中で、子どもの言葉遣いが非常に気になるという意見が非常に多かった。その点、この教室ではかなり徹底された部分をヒアリング時に感じた。子どもたちと関わる上で、きちんと大人と子どもの線引きをするように心がけている。例えば、敬語で話すよう指導するなど、馴れ合いにならないように心がけているとおっしゃっていた。

しかし、このことは誰にでもできることではない。他人の子どもを叱るということは、なかなかできないだろう。また、それをフォローアップしてくれる指導員の存在が不可欠である。こういった役割分担があって、はじめてこの教室のような事例が成り立ってくるのだろう。

（門間雅利）

横浜市　「川上小学校はまっ子ふれあいスクール」

チーフパートナー　ASさん　53歳
スタッフ　YTさん　45歳

1. 活動の現況

川上小学校では、はまっ子ふれあいスクールとして平成13年度から活動をスタートさせている。月曜日から土曜日まで、週に6日間、授業終了後から18時まで活動を実施している。各教室の常勤のチーフパートナー1人と、非常勤のスタッフ3人が活動を支えている。

主な活動内容は、自由遊びを主に毎月継続して行っているイベント（工作ディ・理科実験講座・編み物教室など）や、季節行事（クリスマス会・お正月遊びなど）である。イベントは、普段はスタッフやチーフパートナーが企画運営をする。保護者がボランティアとしてイベントを行ったり、一度講師として参加した人が活動の雰囲気を気に入って、定期的に講座を開いたりもする。水曜日にイベントを実施するため、これに参加するためにおけいこごとの曜日をずらした子もいるほど、人気のプログラムがたくさんある。その他、子ども向けのイベントのほかに、保護者対象の勉強会なども実施しているが参加者は少ない。

ASさんはチーフパートナー(常勤・24万/月)として活動の計画、運営、スタッフのシフト管理、プリント作成、保護者対応など活動全ての運営を指揮している。YTさんはスタッフ（非常勤・840円/時）として、受け付け、子どもの見守りを行っている。その他に、チーフパートナーのサブとして、事務処理の手伝いも行っている。

2. 有償スタッフの強みと弱み

スタッフは、公募はせずにすべて口コミで募集している。子ども相手の仕事であり、素性のわからない人では困るからである。運営に関わるほぼ全てのスタッフが、有償であるため、当日になってスタッフが無断欠席して困るということはなく、活動は順調に運営できている。スタッフの子どもに対する意識も高く、積極的に活動運営に関わっている。

しかし、無償のボランティアから有償のスタッフになることへの抵抗が強く、人手不足が懸念されている。理由は、スタッフになると、時間が拘束されるということと、薄給の割に子どもを預かるという大きな責任が発生するため、同じように仕事をするのであれば他の仕事をする保護者もおり、保護者の中から積極的に有償のスタッフになりたいという声は上がってこない。

3. 子どもの成長を楽しめることが続ける要因

ASさんは、平成13年度の立ち上げの時にPTAで役員をしていたため声がかかり活動に参加した。その後、しばらくはスタッフとして活動に参加し、平成19年度からチーフパートナーとして、活動がある日はほぼ毎回参加している。活動を続けているのは、子どもたちが「Aちゃ～ん」（ニックネーム）と毎日声をかけてくれることや、日々成長していく子どもの様子近くで見られることが楽しいからである。また、長く続けていることで、川上小学校に対する愛着度の高さも活動を続ける要因になっている。

1年生から6年生まで見守った子どもたちの卒業式では、担任の先生よりも感動し涙しているという。はまっ子が、親でもなく学校の教師でもない第三者が子どもを温かく見守り、成長を喜べる活動になっている。

4. ストレス発散の場としてのはまっ子

YTさんは、平成16年度にPTA役員をしていた友人が、楽しそうに活動に参加しているのを見て興味を持ち、スタッフとして参加するようになった。現在は週に2～3回参加している。この活動に継続的に参加するのは、子育ての悩みや世間話ができる仲間がいるため、ストレス発散の場になっているからである。普段の運動不足も子どもと一緒に遊ぶことで解消されるため、YTさんにとっても大切な居場所になっている。

5. 子どもが楽しむためにはスタッフが楽しむことが第一

川上小学校は、全校生徒のうち81％の子どもが登録をしているという、他と比べてもダントツに参加率の高い教室である。それは、スタッフ自身が楽しんで参加することが大切という意識がスタッフ全体に根付いているからである。また、ただ、金銭目的ではなく、子どものためにという思いで参加しているため、

両氏ともに、PTA役員として学校に関わっていたこと、もともと子どもに興味があったことが共通である。また、自分の子どもがいる・いないに関係なく、地域の子どものためにという思いで参加している。さらに、参加している子どものためという観点だけではなく、自分たちも自分たちなりの楽しみ方を見つけて活動に積極的に参加している。

6. 保護者と先生ではない第3の大人の目が大切

保護者にとって、学校の教師よりもチーフパートナーやスタッフの方が同じ小学校の保護者であったという点で、ざっくばらんに話ができ、気持ちを共有してもらいやすい雰囲気がある。そのため、子どもの学校での問題や子育ての悩みなどをスタッフに話して気が楽になったという保護者もいる。子どもの問題を、学校や保護者よりも先に見つけ問題解決に一役かった事もある。子どもを親だけ、学校だけではなく、親・学校・地域で見守る体制が整っているようである。親がひとりで子育てを抱え込まないためにも、保護者にとっても大切な活動である。

7. さらなる充実のための要望

行政に対してはもっと見守りの人員を増員できるようにして欲しいということである。前年度末の参加者数で次年度のスタッフの人数が変わるため、柔軟にスタッフの増減ができず見守りが不十分になってしまう。最低3人のスタッフは子どもの人数に関係なく確保する必要がある。

保護者対しては、月に一回でもいいからボランティアとして活動に参加してみて欲しいということである。自分の子どもだけでなく広く周りの子どもも見れる親になってほしいなと感じる場面が多くあるようだ。有償のスタッフがいることで保護者が手伝おうという気持ちではなく、任せっきりになってしまっていることが、今後活動を続けていく上で気がかりである。

8. 聞取り者の感想

子どもにとって大切な場所であるだけではなく、仕事とはいえ活動を支えるスタッフにとっても大切な空間となっていることが分かった。有償のスタッフだけではなく、保護者にもっとボランティアとして参加して欲しいという要望も出ていたが、自分の子どもではなく子育てがひと段落した地域の人が子どもと触れ合うことで、一歩引いた視点から子どもと接することが出来るとの重要性も感じているようだった。

謝金は他の地域と比べるとたくさんもらっているようにも思えるが、ほぼ毎日活動を行っていること、充実した活動内容を考えると納得できる金額である。活動の頻度、内容、地域の人材の有無によって有償・無償と使い分ける必要があるようである。今後有償のスタッフ・無償のスタッフ両方の人材の活用をどのように進めていくのか注目したい。

（大瀧景子）

2 行政と地域のパートナーシップ

事業名
五泉市「のびのび学習教室」
長岡市「希望が丘あそびの城」
三条市「つくしっ子クラブ」

実施主体のプロフィール	
実施主体の名称	五泉市教育委員会生涯学習課
住　所	〒959-1862　新潟県五泉市旭町7-11
連絡先	☎0250-42-5195
実施主体の名称	希望が丘あそびの城実行委員会
住　所	〒940-2126　新潟県長岡市西津町2301-1
連絡先	☎0258-29-0808
実施主体の名称	三条市教育委員会子育て支援課子育て支援係
住　所	〒959-1192 新潟県三条市新堀1311
連絡先	☎0256-45-1113

1.五泉市「のびのび学習教室」の概要

「五泉市寺子屋事業『のびのび学習教室』」は、「基礎学力の向上と好ましい人間関係の育成」を通して「児童一人一人の基本的生活習慣を培う」ことを目標に、五泉市内の公民館や庁舎空きスペース等を活用し、市内全小学校区11地区（全13教室）において全学年の希望児童を対象に、週2～3回開催されている。

活動内容は、主に学校から出された宿題や音読課題、また事業独自のドリル等の学習指導であり、子どもたちの自主学習が基本となっている。また、学習活動の後には、子どもたちの自由活動（スポーツ・レクリエーション等）が展開されている。

教室指導者は、子どもたちの自主学習を支援する学習アドバイザーとしての役割を担うとともに、安全管理員として子どもたちの放課後活動全般をサポートしている。

2.長岡市「あそびの城」の概要

希望が丘小学校の子どもを対象に、週5日ほどの活動を行っている。平成19年度の活動状況では、年間を通して292回の活動日数、参加児童数は延べ31206人の子どもたちに遊びを提供してきた。主な活動場所は希望が丘小学校、希望が丘コミュニティセンターなどである。

主な活動は、自由遊びや昔遊び、囲碁・将棋などの指導を行っている。理科の実験も行っており、長岡造形大学、長岡技術科学大学等との連携をとり、様々な活動に精力的に取り組んでいる。

また、ボランティア研修会なども独自に行っており、子ども理解やパソコン講習など、ボランティア自身のスキルアップにも努めている。

3.三条市「つくしっ子クラブ」の概要

三条市では、市内24校中8校で放課後子ども教室を実施している。その内6校は週に1回（水曜日）、2校は週に2回（水曜日と土曜日）に活動を行っている。運営は各小学校にいる運営主任（謝礼は1回2000円）3～6人が中心になって進め、見守りはボランティア（謝礼は1回500円）6～8人が行っている。ボランティアの割振りの担当は、市の担当者と運営主任が相談して決めている。平日は地域の人が、土曜日は保護者も協力して活動を支えている。

事前の保険登録は全校生徒がしており、参加したい日は直接放課後教室の受付にカードを提出することで、活動に参加することができる。活動の内容は、トランプ、お手玉、ピアノ練習、ビーズ手芸、お絵かき、バトミントン、ドッジボール、バスケットボール、キックベース、大縄跳び、一輪車、おにごっこなど、子どもたちが自由に遊びを選び、自由に過ごしている。宿題も子どもが必要とあれば、スタッフが教えたり手伝ったりもしている。

五泉市「のびのび学習教室」のレクリエーション活動の様子

五泉市寺子屋事業「のびのび学習教室」

五泉市寺子屋事業運営委員会委員長　TYさん　　76歳

1. 活動の現況

TYさんは、この寺子屋事業「のびのび学習教室」運営委員会の委員長を務め、事業に関わる指導員等のコーディネーター役を担うとともに、村松地区（週3回）と十全地区（週2回）の教室の指導（学習アドバイス及び安全管理）に携わっている。なお、本事業の指導に当たっては、活動1時間当たり510円の報償費が市から支給されている。

この教室の活動内容は、主に学校から出された宿題や音読課題、また教室独自のドリル等の学習指導であり、子どもたちの自主学習が基本となっている。また、学習活動の後には、子どもたちの自由活動（スポーツ・レクリエーション等）が展開され、異学年の児童の遊びや運動等を通して、縦・横の好ましい仲間作りを行っている。

この教室では、参加する子ども一人から、週2回参加の場合は月1,500円、週3回参加の場合は月2,000円の「受講料」を徴収し、子どもたちのおやつ代とドリル代に充てている。

現在、この事業全体の参加児童数は325名であり、指導者は54名（その内、18名は学校教諭経験者）である。年々、希望する児童数が増加しているものの、指導者と活動場所が不足しているといった課題も見られる。

2. 子ども放課後教室に参加するようになった動機と関わり

TYさんは、小中学校教諭、派遣社会教育主事等を歴任し、退職後は同市青少年育成相談室の相談員等を務めていた。五泉市教育委員会（担当:生涯学習課企画推進係）の要請を受けて、平成17年度における寺子屋事業の準備計画段階から本事業に関わり、平成18年度の本実施以来、現在で3年目を迎えている。TYさんは、この放課後子ども教室の他、新潟県青少年育成アドバイザーや地域子ども守り隊等、地域の青少年の健全育成に係る活動にご尽力されている。

3. 子ども放課後活動のさらなる充実のために

TYさんによると、学校や家庭における指導の妨げにならないよう学習支援を進めるとと、安全管理上、児童に怪我やトラブルがないよう、かなりの神経を使っているとのことである。特に、児童の人間関係の調整が必要な場合は、指導者間での情報交流（引き継ぎ時等で）を綿密に実施するとともに保護者にも伝達するといった活動を行っているようである。

また、活動の詳細を示すマニュアルがなく、運営委員長として教室指導者の把握や指導者間の考えの違いに対する調整（コーディネート）に苦労しているようではあるが、現在は教室の基本マニュアルを作成し、各教室・児童等の環境にあった指導を実践しているとのことである。

さらに、学校施設が使用できない状況であることから、前述のとおり活動場所が

不足しており、活動内容も限定されているといった問題も見られる。行政側に対しては、是非とも学校施設の開放を望むとのことである。

TYさんとしては、学童保育との役割分担を明確にし、学校や保護者に対しては、本事業があくまでも自主学習の場としての「寺子屋教室」であることを理解していただいた上で参加してほしいとの要望があるようである。

4. 聞取り者の感想

TYさんは、小中学校教諭・派遣社会教育主事を歴任され、さらに長年にわたって地域の青少年健全育成活動に携われたことなどの経歴を踏まえ、市教育委員会から依頼を受け、この「寺子屋事業『のびのび学習教室』」の立ち上げ当初から御尽力されているようである。

市教育委員会からは、ある程度の自由な裁量により教室の運営が任されているとのことであり、取組に対しては、学校・保護者から感謝の声が寄せられているようである。特に、子どもの安全管理や人間関係の構築に対しては細心の注意をはらい、適切な対応を心がけていることは、このような放課後子ども教室を運営するにあたって特筆すべき点であろう。加えてTYさんからは、今後の円滑な事業運営のためには、放課後子ども教室の活動における明確な方針を設定する必要性があるとの意見も聞かれた。

また、活動場所の確保・拡大については、学校施設が活用できるよう学校の理解を得ることが大きな課題として見られた。

さらに、学校・保護者・地域住民・行政が共に手を携え、放課後子ども教室の目指すべき方向性を明確にするとともに、事業に関わる全ての指導者の共通理解のもと、地域全体で子どもたちを育んでいくことがさらなる充実した取組になると感じた。

（五十嵐秀介）